

**「出会い」
特別会員寄稿****1 冊の本に出会って****社会教育・生涯学習研究所所長 細山 俊男****『施設に暮らしをきずく』を読んで**

実践の本を読んでその著者に会いたくなることがある。内容に感動するからであるが、同時にどこか本当かなという思いを解消したいからでもあった。これは性分だろうか。

30年も前になるが、私が公民館職員だった頃、『施設に暮らしをきずく』（小野隆二著、全障研出版部、1984）という本を読んだ。そのとき私は若い公民館職員であったAくんと「障害者の社会教育」について議論していた。公民館は障害をもつ人たちにどれだけひらかれているだろうか、社会教育は本当にひとりひとりをだいにしてきただろうか、などと私は公民館に10年勤めながら迷いに迷い始めていた。

その著者の小野さんは東松山市にある「あかつき園」という知的障害者の入所型授産施設の園長だった。あかつき園は東松山の森林公園の近くの農村地帯にある。椎茸、田圃、花卉、養鶏など農業が中心の仕事で、この本は、障害をもつ仲間と職員とが協同するあかつき園の「施設づくり」の記録だった。

「仲間たちはみんなどこかに足りないものがあって、しかもどこかの部分では不足を補いそれをのりこえるようなすばらしさをもちあわせているものだ。人間誰でもそうだと思う。どんなに足りない部分があっても、どこか一点だけでも人は輝きをもっている。私たちはこの輝きを仲間のなかに見出してそこを目いっぱい輝かしてもらいたいと思う。それが私たちの仕事なのだから」という小野さんの文章が気になっていた。

著者 小野隆二氏との出会いと農作業

5月のある日、私はAくんを誘って、あかつき園を訪ねた。はたして小野さんはその大きな体に似合わず、ぼそぼそと、そして人懐っこく語る人だった。あかつき園のなりたち、仕事、仲間たちの暮らしを聞きながら、「最近ボランティアも多くなりましたが、なかなか農業をやる人がいませんでね」というのに、私が「農業はだれでもできますか？」と尋ねると、「できますよ」と小野さんは笑顔で答えた。

それならと、私とAくんは、あかつき園で、仲間たちと農作業をすることを決めた。所沢から車で往復3時間。毎週月曜日、午前9時から午後4時まで仲間たちと働くことになった。

私たちの仕事はその日の朝に決まる。農耕班や椎茸班というのがあって、それぞれ人手が足りない所に振り分けられる。仲間と一緒に畑を耕したり、ほだ木を運んだり、私には農作業は初めての経験だった。作業しながらあるいは昼食をとりながら仲間たちと話すことがある。親や兄弟に会えない寂しさを抱えながら、明るくふるまう仲間たち。少しエキサイトした仲間に真摯に向き合う職員の誠実さ。休憩時にへたっていると「だいじょうぶ？」という仲間のことばに私は励まされていた。

その日は養鶏班の仕事であった。大きなかまぼこ型の鶏小屋の前で、職員のTさんは思わぬことを言った。「ここに資材がありますから、これと同じ鶏小屋をつくってもらえますか？」広さが5m×10mの大きな鶏小屋。パイプとシート、金網、針金、スコップ、かなづち、ペンチが準備されていた。もちろん、私もAくんも鶏小屋を作った経験はない。夏の暑い陽射しの中、すべてを任された私たちは見様見真似で地面に線を引き、穴を掘り、鶏小屋の建設、作業を始めた。2週にまたがって作業は続き、なんとか鶏小屋は完成した。翌週、そこにたくさんの鶏がいた光景は今も忘れていない。

あかつき園での1年間はこのことに集約される。土と汗とおおらかな人間関係そしてあたたかなまなざし。人間誰でも同じだと私も思う。仲間たちと共に農作業や鶏小屋づくりのなかで私たちも確かに耕されていた。

社会教育実践の場・公民館の必要性

しかし、仲間たちの課題は施設の外にあった。作業が休みの土曜日や日曜日の過ごし方。施設から出かけていく場所がほしい。カラオケしたり卓球したり、囲碁・将棋でもいい。お金をかけずに自由に出かけて行き、あかつき園以外の人たちとふれあう機会があればと職員たちは願っていた。

地域にあって、誰でも出かけて行ける場所、いろいろな人とふれあえる場所、そこでスポーツや文化活動ができる場所、それは社会教育施設に他ならない。仲間たちのために公民館ができることがある、そう確信した。こうして1988年の春、Aくんと私は所沢で障害をもつ人たちと社会教育実践を始めることになった。